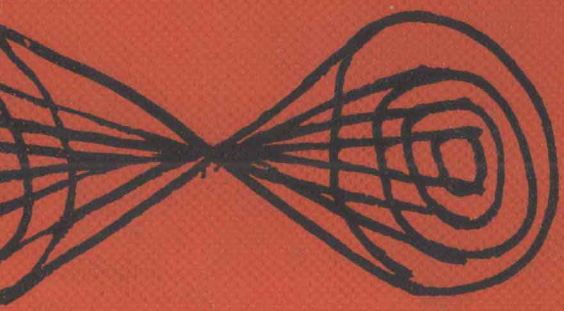

コンラッド

世界文學大系

86

コンラッド

ナーシサス号の黒人　青春
ロード・ジム　勝利

高見幸郎・橋口　稔・矢島剛一
野口啓祐・野口勝子　訳

世界文學大系

筑摩書房版

世界文学大系 86

コンラッド

昭和42年12月25日初版第1刷発行

訳者代表　矢島剛一

発行者　竹之内静雄

発行所　株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 4123　電話(291)局7651

目次

ナーシサス号の黒人　高見幸郎訳　5
青春　橋口稔訳　100
ロード・ジム　矢島剛一訳　120
勝利　野口啓祐・野口勝子訳　312
コンラッド、秩序とアナーキー　アーヴィング・ハウ　鈴木建三訳　539
解説　鈴木建三　563
年譜　570

裝

幀

庫

田

發

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

コンラッド

ナーシサス号の黒人

I

ナーシサス号の一等航海士ベイカー氏は、あかるい船室から出ると、暗い後甲板の闇のなかへ一歩足をふみいれた。彼の頭上、船尾楼の端にいた当直の男が二点鐘を打ち鳴らした。夜の九時である。ベイカー氏は頭上の男を見あげて言った。「おいノールズ、みんな船に来ているかね？」

上にいた男はびっこをひきながらはしご段をおりてきたが、ちょっと考えこむようにして答えた。

「来ていると思います。もとからの連中はみんないるし、新入りももうだいぶ来たから……。これで全部そろったんじゃないですか」

「よーし、みんなを艦に集めるよう水夫長に言ってきてくれ」ベイカー氏は命じた。「それからな、だれか若い者に言いつけて、ここへあかるいランプ一つ持ってこさせてくれ。人員点呼をするからな」

正甲板のうしろのほうは真暗だったが、前から半分ほどきたところでは、水夫部屋の戸が左右ともにあいていて、船をしずかにおおった夜の闇も、そこだけは戸口からさし出た二条のあかるい光のためにとぎれていた。はじめのうちぶつぶつ言う声がしていたが、やがてそのあかるい左右両舷の戸口からぞろぞろと人影が現われた。だが光を背にした人々の姿は、ただ真黒な厚みもなにもない影絵でしかなく、人の形に切り抜いたブリキ板を一瞬思わせた。船はすでにいっさいの準備をおえ、出帆を待つばかりだった。ちょうど二時半の五点鐘が鳴ったとき、大工は主舶口の当て木に最後の楔を打ちおえ、大槌をほうり出してじっくりと顔の汗をふいたのだった。甲板はすべて掃除がおわり、揚錨機には油が差されて、いつでも錨を上げられるようになっていた。ふとい曳綱は二つ折りにして正甲板の片側にながながと置かれ、その一方の端は、曳船にすぐ渡せるように船首まで持っていって、外にたらしてあった。曳船はあすの朝早く、しずかに澄みきった涼しい空気の中を、暑苦しい煙をはきながら騒々しい音を出し、水をかき立ててやってくることだろう。船長は、あたらしく乗組員を雇い入れるために上陸中だ。幹部船員たちは、その日の仕事がおわったところでひとまず一服していた。日が暮れてまもなくすると、上陸していた船員や新規に雇われた者たちは、はしけで本船にはこばれてきたが、白服を着た漕ぎ手のアジア人たちは、舷梯に着かぬうちから金をくれとうるさく言い出すのだった。彼等がはげしくかん高い声で東洋語をまくし立てれば、酩酊した船員たちはおうへいな調子で負けずにやり返し、ふっかけられたあつかましい要求にむかってひどい言葉を大声であびせかけるのだった。かくて星影さやかな、かがやける東洋の平和は、わずか五アンナから八アンナそこそこの金をめぐって生じた怒号や哀訴によってずたずたにひき裂かれ、みるもむざんな姿と化していった。そしてこのさわぎのおかげで、ボンベイ港に浮かんだ船の人間ひとりのこらず、あたらしい船員がナーシサス号に乗り組むところだなとわかってしまったのである。

やがてこうした騒ぎはしずまっていった。三艘も四艘ものはしけがばしゃばしゃ水音をたてていちどきにやってくるのもやんで、一艘だけが本船の舷側に近づいて横づけになった。なにやらぶつぶつ言い合う声がしていたようだったが、「これ以上一パイスだってやれるもんか。きさまなんぞはとっとと地獄へうせやがれ！」というひと声を残して、細長い袋を肩にかついだ、黒々とした一つの人影が、舷梯をよろよろとのぼっていった。船首楼の水夫部屋ではといえば、新入りの連中が、綱をからげた木箱や寝具の包みの間につっ立ち、あるいはからだをゆすりながら、前からいる連中と仲間附き合いをはじめているところだった。古い連中は二段にならんだ蚕棚のような寝台の上段に坐って、これから相棒となる男たちを、あらさがしでもするかのようにじっじろと、それでいて親しみをこめたまなざしで見守っていた。芯を長く出したランプが二つ、どぎつい光をはなっていた。上陸用の山高帽子をあみだにかぶった者もいれ

ば、床の上の錨鎖の間にほったらかしにしている者もあった。襟のボタンをはずして白いカラーを赤い顔の両側にとび出させている者もあれば、白い袖からつき出たふとい腕を動かしている者もあった。どっと湧く笑い声や呼びかわすしわがれ声の合間から、ぶつぶついう低い話し声がたえずきこえていた。「おい坊や、おまえさんの寝場所はそこだよ……だめだめ、それをやっちゃいけねえよ……ここへ来る前は何に乗ってたんだ？……おれ知ってるぞ、その船なら……三年前に、ピュージェット・サウンドにいたっけな……なあおい、この寝床は水がもってきやがるんだぜ……どれ、その箱をかしてみな、振ってみてやらあ……陸上からおいでのお歴々のなかで、酒をもってきたお方はいねえのかい？……たばこをちっとくれねえかな……知ってるよ、その船。そいつの船長は飲みすぎて死んじまったのさ……なかなかいかす男だったぞ、あいつは……アルコールの洗い薬で腹の中までざぶざぶやったってわけさ……いかんいかん……静かにしろよ、おまえたち……いいかい、おまえさんたちけっこうな船においでなすったってわけよ。なにしろ奴らは、かわいそうなおれたちをさんざんしごいて、しこたま儲けようってんだからな……」

名前はクレイクだがベルファストというあだ名の小男は、そもそもが大袈裟な言い方をするのがすきな男で、いまもこの船の悪口をさんざん話してきかせ、新入りの連中を考え込ませているところだった。アーチイは膝小僧がじゃまにならないように衣装箱の上に横坐りに腰をかけ、せっせと針をうごかして青いズボンに白いつぎきれをあてていた。黒い短上衣に立襟の男たちは、毛深い胸がのぞいてみえる色シャツを着た、腕はまる出し足もはだしといった連中といっしょになって、水夫部屋のまんなかでしきりにもみ合っていた。もうもうたるたばこの煙のなかで、彼等はスクラムを組んだかのように、わっしょわっしょと押し合いへし合い立廻りを演じ、いっせいになにか物を言ったかと思うとふたこと目には罵声を浴びせ、ののしり合うというありさまだった。ピンクの縞のはいった黄色いシャツを着たロシヤ系のフィンランド人は、もじゃもじゃの髪の毛の下から、夢見るような眼差でじっと上を見つめていた。すべっこい童顔をした二人のスカンジナビアの若い巨人は、黙々として仲よく寝具をひろげながら、意味もない陽気な罵声が嵐のように乱れとぶのを、しずかに微笑しながらきいていた。有能な船乗りで最年長の老シングルトンは、ひとりはなれてランプの下で本を読んでいた。ズボン一枚の腰から上は裸で、たくましい胸と筋肉隆々たる二の腕には、謝肉祭の音頭取りのようにいれずみがしてあった。赤と青のだんだら模様の間にのぞいた彼の皮は膚白く、繻子のようだった。裸の背中を第一斜檣の根もとにもたれたまま、彼は腕いっぱいにのばした両手で本を持ち、日焼けした大きな顔をそれに向けていた。眼鏡をかけ、あごには威厳のある白ひげをそなえた彼は、さながら未開人の間の学識豊かな族長といった感じであり、いわば、この世の冒瀆的な喧騒の中で泰然と落着き払った、野蛮なる叡智の化身のように思われた。彼は読書にすっかり心を奪われた様子で、ページをめくるごとに並々ならぬ驚きの表情がそのごつごつした顔に現われるのだった。読んでいたのは『ペラム』である。南方航路の船の水夫部屋でブルワー・リットンが人気があるということは、驚くべきふしぎな現象であった。洗練されていると同時に妙に誠実味に乏しいその文章が、あてどもない放浪の世界ともいうべきこの薄暗い水夫部屋をすみかとする大きな子供たちの単純な心に、いったいどのような思いをかき立てるというのであろうか？　リットン卿の典雅で饒舌な書物の中に、あらくれた粗野な魂ははたして何を見出すというのであろうか？　いかなる感激があるというのか？　どのような恍惚が、どんな慰めがあるというのか？　まさに謎だ！　理解できないものが持っている魅力だろうか？　存在しえないがゆえの魅惑だろうか？　それともまた、いわゆる人生からははずれた外に住んでいるといってもいいこの海の男たちは、不名誉と汚辱にみちた世界が、醜悪と飢餓、悲惨と消滅の中にとじこめられた光まばゆい陸の世界が、束の間の啓示のごとくその姿をあらわすのに心ときめかすのであろうか？　その世界こそは、彼等が住む堕落を知らぬ清廉なる海をば四方から取りまき、海に終生つながれた囚人にもひとしい彼等船乗りが垣間見をゆるされる唯一の人生ではなかったのか？　すべては謎である！

シングルトンは、十二の年にはじめて南方航路の船に乗り込んで以来、ここ四十五年間のうち（船員手帳から計算すると）四十カ月とは陸上にいたことがない男であった。長い年月を立派に勤めあげたことからくるおだやかな落着きをその身にそなえ、給料をもらって一つの船をおりたあと、次の船に乗り組んで出帆するまでのあいだ、いまだかつて酒に酔って前後不覚のうちに夜を過ごしたことなど、ただの一度もなかったことが自慢のこの老シングルトンは、さわがしい話し声や叫びに動じる気配も見せず、じっと坐ったまま、ゆっくりと『ペラム』のページの文字を追い、無我の境地に没しきっているかのようだった。その息づかいはきわめて規則正しかった。大きな黒ずんだ手でページをめくるごとに、太い白い腕の筋肉が、すべらかな皮膚の下でわずかにくり、くり、とまわるのだった。長いあごひげにまで滴ったタバコの脂で黄色にそまった彼のくちびるは、白いロひげによってほとんどかくれていたが、黙読につれてたえずかすかに動いていた。かすんだ眼は、きらりと輝く黒縁の眼鏡の奥からじっと前を見すえていた。彼とむかい合って、ちょうど彼の顔と同じ高さのところには、船の飼い猫が揚錨機の胴の上に坐り、うずくまった怪物を思わせるかのように、青い瞳をこの古なじみの老水夫に注いでいた。あたかもそれは、シングルトンの足もとに坐っている若い水夫のこごめた背中をとびこえて、老人の膝にとびつろうと機会をじっとうかがっているかのようだった。若いチャーリーは、やせた、首の長い男だった。ごつごつした背骨が、ふるぼけたシャツの下に、ちょうど一列に並んだ丘のようにとび出ているのが見えた。町の浮浪児のような彼の顔は、ませていて、ずるがしこそうで、薄くて横に大きい口の両側には深いひだがあり、人を小馬鹿にしたような顔である。その顔を彼は骨っぽい膝小僧にすりつけんばかりにうつむいて、古い綱の切れっぱしで、ラニヤード結びの稽古中だ。おでこの額には小さな汗の粒がふき出ている。彼はしょっちゅうふんふんと鼻をならし、落着きのない眼をきょろりと動かしては前にいる老水夫を盗み見る。だが老シングルトンは、仕事に辟易してぶつぶつ言っているこの若い者には、いっこうに注意を払わなかった。

室内の喧騒が一段と増した。小男のベルファストは、水夫部屋のむんむんする暑さでますますかっかとなっていきまいていた。眼をぱちつかせ、顔は真赤に上気して、仮装面のように滑稽味をおび、口を大きく黒々とあけて、おかしなしかめ面を彼はしてみせていた。前にいた半裸の男は、脇腹をおさえ、頭をのけぞらせて、まつ毛が涙でぬれるほど笑いこけていた。ほかの者たちは、驚いたような眼つきでじっと眺めていた。上の段の寝棚にからだを二つ折りに曲げた姿勢で腰かけている連中は、茶色の素足をぶらんと下へたらしながら短いパイプを吸っている。その足の真下で、衣装箱に大の字に寝そべった連中は、ほおけたようにあるいは軽蔑したように、にやにや笑ってじっと耳を傾けていた。寝床の白い縁からは、眼をぱちくりさせている男たちの頭がずらりとつき出ていたが、からだの方は奥の暗いところにひっ込んでいてよく見えなかった。この奥の暗いところというのが、さしずめ白壁のあかるい屍体置場の部屋の隅にある、棺桶をいれる壁龕を思わせた。人声はまたひときわ大きくなった。唇をきゅっと結んだアーチイは、いっそう狭苦しい場所にひきこもるかのように身をちぢめ、おし黙ったまませっせと針仕事をつづけた。ベルファストは神がかりのついた回教僧のように、きいきい声で叫んでいた。「……そこでおれはそいつに言ってやったのさ――はなはだどうも失礼ではございますが、とね、その船の二等航海士におれは言ったのさ――はなはだどうも失礼ではございますが、商務院のお役人たちは、あんたに免許状をくれたときにゃ、さぞかし酔っ払っていたんでしょうな、とね。そしたらやっこさん、気が狂った牡牛みたいに怒り出しやがって、何をぬかす！　ときたのさ。洋服は白ずくめときてる。そこでおれはタールの壺を持ち上げて、そいつのきれいにしているいまいましい顔めがけて、しゃれこんだ洋服の上からどぶんとひっくり返してやったのさ……これでもくらえ！　とな――こう見えたっておれはれっきとした船乗りだ、なんだてめえは、なんでもかんでもでしゃばってきやがって、船長の御機嫌ばかりうかがって、なんの役にも立たねえ、穀つぶしの、船橋にただつっ立ってるだけの丸太ん棒野郎め！　このおれさまを見てみろってんだ――とな、一発ど

やしつけてやったのさ。そいつがぴょんぴょん跳ねて歩くとこを、まったくおまえたちに見せたかったなあ。タールでどぶどぶになって、眼もあけていられねえざまときたら、まったくなあ……」

「こいつの言うこと信用するなよ。こいつがタールなんかひっくり返すもんかい、おれはそばにちゃんといたんだからな」と誰かが大声で言った。二人のノルウェー人はとまり木にとまった番いのぼたんインコのように、ならんで衣装箱の上におとなしく腰をかけ、無邪気そうな眼をまるくしてこの場面をじっと見ていた。だがロシヤ系のフィンランド人は喚声と笑いの大渦のさなかにあって、まるで背骨のないつんぼのように、だらりとして身動きひとつしなかった。彼のそばでは、アーチイがにやにやしながら針を使っていた。胸幅の広い、眼のとろんとした新入りの男が、騒ぎの合間をねらってベルファストにゆっくり話しかけた。「よくもまあこの船の士官たちは、おまえさんみたいな奴といっしょにやってゆけるんだね。おまえさんのほうであっちを飼い馴らしちまったんだろうが、ま、あの連中、それほどたちのわるい人間でもねえってことだな」

「わるかねえさ、わるいことなんかあるもんか」とベルファストはきいきい声をはりあげて言った。「いっしょになって仕事をするんでなけりゃあな……わるかないよ。ただし、なにかきっかけさえあるとみりゃ、わるいことをしようって奴らだがね、あんちきしょう！」彼は腕をぶるるんとふりまわし、口から泡をふいてまくしたてたが、突然にたりと笑うと、ポケットから固めた黒たばこを一個とり出し、わざとおかしげに獰猛なそぶりを気取ってぐいと噛みちぎった。もう一人新入りの男がいたが、これはずるそうなすばしっこい眼つきをしていて、黄ばんだ細長いけんのある顔の男で、先程から中央戸棚のかげで口をぽかんとあけてみんなの話を聴いていたのだが、きいきい声でしゃべりはじめた。「ま、どっちみち本国へ帰る船じゃねえか。わるかろうとなんだろうと、国へ帰れるとなりゃ、我慢するぐらいはお安いご用さね。帰っちまえばこっちのもんだからなあ。今に見てろってことさ」みんなは彼の方をふりむいた。知らん顔をしているのは例の並水夫と猫だけである。この男、手を腰にあててつっ立っていたが、まつ毛の白い背の低い男で、ありとあらゆる堕落と狂暴さをなめつくしてきたといった感じだった。さんざん殴られ、蹴とばされ、泥の中をころがされ、かきむしられ、唾をはきかけられ、言いようもないほどの罵詈讒謗を浴びせられてきたというかのようだった。彼は周囲にむらがる顔を見まわしてほっと安心したのか、わずかに微笑をうかべていた。彼の耳は、つぶれかかった固い帽子で押しつけられて、下むきに垂れていた。黒い上衣のすそはずたずたにさけて、足のふくらはぎのあたりにぴらぴらとまとわりついていた。服のボタンは二つしか残っていないのに、それすらはずしたままなので、下にシャツを着ていないのが誰の眼にもまる見えだ。持主があろうとも思われないほどのぼろなのに、彼が身につけていると、誰かから盗んできたのではないかと見えてくるのは、さしずめこの男の身から出た錆とでも言おうか、いたしかたない不運であった。首は細く長く、まぶたは赤かった。まばらな髪の毛が顎のあたりまでたれ、肩は痩せこけ、折れた鳥の羽のようにだらりとなっていた。左脇に泥がガリガリとくっついていたのは、最近溝の中で寝たことをものがたっていた。彼は、ついふらふらとアメリカ船に乗り組んだのだったが、役にもたたぬ自分のからだを、荒々しい破滅から救い出すべくその船を脱走した。それから二週間、彼は上陸して土民の間をあっちこっちとさまよい、乞食のように飲みものを貰ってあるいたり、空き腹をかかえてごみくずの山で寝たり、昼日中はふらふらとうろつきまわっていたのである。まさに悪夢の世界からやってきた異様な訪問者といってよかった。彼は急にしんとなった部屋の中で、口にうす笑いをうかべながら、無愛想につっ立っていた。このこぎれいな白くぬった水夫部屋こそ彼の避難所なのだった。ここでならなまけていられるのだ。ごろごろと転げまわって、寝そべって、食事をして、そして喰いものの悪口を言ったりすることができる場所なのだ。仕事をさぼる、人をだます、そして他人にものをねだるという彼の本領を発揮できるのはここなのだ。人を口車にのせたり、弱い者いじめをしたり、そしてこういったことをさんざんやったあげくに、給料をちゃっかりせしめることがで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

きるのもここなのだ。こうした彼のことを誰ひとり知らない者はいなかった。そもそも、嘘や鉄面皮がいつの世にも大きな顔でまかり通るものだという事実をまじまじと見せつけるこのような不吉な見本が、この広い世界にいなかったためしはないのである。鉤のようにまがった指をした、長い腕のだんまりやの老水夫は、仰向けに寝てたばこを吸っていたが、ごろりと寝返りをうつと、この男を頭の上からじいっと見据え、扉のほうにむかって白い唾をペッと吐きすてた。こうした人間のことを誰ひとりとして知らぬ者はなかったのである！　こうした男にかぎって、舵も取れなければ、ロープをつなぐこともできないし、暗い夜には仕事をさぼり、マストの上では気ちがいのように四つんばいでしがみつき、風やみぞれの暗闇にむかってわめきちらす男なのだ。ほかの者が働いているときに、ひとり海を呪ってばかりいる手合いとはこうした男のことなのだ。呼ばれれば人より一番おくれて顔を出し、真先きに舞いもどってくる奴がこれなのだ。たいていのことは出来ないくせにして、せめても出来ることとなるとしたがらないという人種なのだ。いうなれば博愛主義者のお気に入りであり、利己主義にこりかたまった山出し水夫なのである。自分の権利となると何から何まで心得ている感心な奴だが、勇気や忍耐や信義感や、船の仲間同士を一つにつないでいるあの暗黙のうちの忠誠心となると、全然わかっていない男である。厳粛なる海の務めをば軽蔑し嫌悪するいわば貧民窟の、下劣なる自由の申し子とも言うべき無責任な男がこれである。

誰かが大声できいた。「おまえの名前はなんてえんだい？」「ドンキンさ」彼はそう言うとしゃあしゃあとした顔つきであたりを見まわした。「おめえはいったい何者だい？」と別の声。「水夫にきまってらあな、おまえさんとご同様さ」彼は真顔で答えたが、そのなかには人を小馬鹿にするような調子があった。「尾羽うち枯らしたぼんこつ同然の汽罐夫と言いたいとこだが、どっこいそれよか数等下の下だね」と委細心得たかのような調子で註釈がはいった。チャーリイは頭をぐいともたげると、小生意気な声でさえずった。「要するに、やつは人間で、そして水夫だってことよ」それから彼は手の甲で鼻の汗を拭くと、ふたたび背をまるめてラニヤード結びにとりかかった。四、五人の者が声を立てて笑った。ほかの者たちは、けげんそうにじろじろ見ていた。ぼろをまとったこの新入りの男は憤然としてうなりたてた。「あたらしく仲間がやってきたってのに、なんと結構なご挨拶じゃねえか。おめえたち、それでも人間か、それとも人喰鬼ってところか？　よう――」「やい、ちょっと言われたぐらいでシャツをかなぐり捨ててむきになることもあるめえ」はげしい勢いで前におどり出たベルファストは、おどすように、それでいて親しげな調子でさけんだ。「こいつ、あきめくらの野郎だな」と、みすぼらしい乞食男は負けずにやりかえした。「おれがシャツなんぞ着てねえってことが見えないのかよう」

彼は腕を横にぐいとひろげ、芝居がかったしぐさで、だらりと腕の骨にぶらさがっているぼろをひらひら振ってみせた。

「なぜかって？」彼は大声をはり上げてしゃべりつづけた。「それはな、あのひでえヤンキー連中が、おれのはらわたをたたき出そうなんてしやがったからさ。おれがれっきとした権利を主張したのが気に入らねえ、ってのさ。おれはな、こう見えたってイギリスっ子だぜ。やつらはおれをやっつけたくってしようがねえ。そこでおれはおん出てやった、というわけさ。おまえたちときたら、ひどい目にあって難儀してる人間ってものを見たことがねえのかい。いやはやまったく、この船ときたらなんとひでえ船かってんだ。おれはもうすってんてんさ。なんにも持っちゃいねえんだ。袋もなけりゃベッドもねえ、毛布もなけりゃシャツもねえ、いま着ているこれのほかには、ぼろきれひとつだってありゃしねえ。でもなあ、おれさまはこれでもヤンキーの奴らを向うにまわしてさんざんたたかってきたんだぜ。だれかこのなかで、仲間の男に股引のひとつもくれてやろうかという奴はいねえのかい？」

彼は、いわばこの連中の単純素朴な本能に訴えるすべをちゃんと心得ていた。彼らはたちまちこの男に憐憫の情を示しはじめた。ある者はおどけた調子で、ある者は軽蔑をこめて、またある者はしぶしぶながらも、である。身にまとった黒いぼろの内側に、白い皮膚の手足がのぞいて見えるところだけが、せめて同じ人間仲間

であることを感じさせるこのへんてこな異様な姿にむかって、まず最初は毛布が投げられた。つづいて彼の泥んこの足のそばに古靴が一足とんできた。「そうれ下の方からだ」と大きな声がしたかと思うと、タールでよごれてどす黒くなったズボンをまるめたのが、彼の肩にあたった。一同の間には、へんな奴だと疑う気持もあるにはあったのだが、博愛の精神のはやてがひとたび吹きはじめると、たちまちいっせいに憐愍の波が立ったというわけである。彼等は、仲間の不幸にすすんで手をさしのべるというわれとわが殊勝な心ばえに、ひとりで酔っていたのである。「おい、おれたちが何とかしてやるからな」と彼等はロ々にさけんだ。「こんなひどいことってありゃしねえ……かわいそうになあ……おれんとこに古いシャツがひとつあるぞ……これでもなんとか間に合うだろうな……そうれ、もってゆきな……」こうした親切なつぶやきが水夫部屋のいたるところでおこった。例の男は、ほうり投げられた品物を素足で山とかきあつめると、まだもっとないかというようにあたりを見まわした。めったに情にほだされることのないアーチイは、ひさしのやぶけた古帽子をひとつ、お義理に寄進した。老シングルトンは、小説が佳境に達したのであろう、このさわぎには耳もかさずに読みふけっていた。チャーリイはこざかしい若者によくある、意地わるげな、皮肉な調子で、きいきい声をはりあげて言った。「おい、もしあたらしい制服をこしらえるんなら、金ボタンの二つぐらいおれがくれてやるぜ」これをきくなり、みんなにお情けをそそいでもらっていたこの汚ならしい男は、チャーリイにむかって拳をふりたて、憎々しげに吠えたてた。「この若造め！　いまにこの部屋の掃除をきさまにやらしてやるからな。心配すんな、まぬけ野郎。ま、そのうちに先輩にたいするロのきき方ってものを教えてやらあな」彼は底意地わるい顔でにらみつけていたが、そのときシングルトンが本をぱたんと閉じたのに気がつくと、あわてたように視線をそらせ、きらきらする小つぶな眼をきょろりとさせてあたりの寝床を見まわした。「あそこの戸口の寝床をもらうがいいや。わりときれいだぜ」ベルファストは言った。当の男は足もとのもらい物をかきよせると、束にして胸にかかえ、寝床の片側に立っていたフィンランド人をじろじろ見つめた。このフィンランド人、放心したような眼つきで、ぼんやりつっ立っていたが、おそらくは北欧人特有のあのうす気味わるい空想にふけっていたにちがいなかった。「おい、そこの他国者、どいてくれ」ヤンキーに虐待されたというこの被害者は言った。フィンランド人は動かなかった、聞いていなかったのだ。「出てゆけよ、こんちきしょう」被害者はどなりつけると、肘でぐいと相手を押しのけた。「どけったら、ふぬけめ！　きさまはつんぼか、唖か？　どきやがれ！」相手はよろめいて、やっとわれに返り、自分を罵倒した男をだまって見ていた。「こういう他国者たちには、しっかと思い知らせとくがな」わが愛すべきドンキンは、水夫部屋の一同にむかって自己の意見をのべたてるのだった。「こいつらにはおのれの分際ってものを教えといてやらないと、いまにのさばりかえってなにをするかわかったもんじゃねえ」彼はもらったばかりの持ち物を、あいているベッドにほうりこむと、成行きいかんとばかりに、ずるそうな眼つきで相手の出方をうかがっていたが、フィンランド人がぼんやりともの思いにふけって立っているので、またもやくってかかった。「きさまのからだじゅうが眠れ上がるように、いっちょうやってやろうか」彼はがなりたてた。「眼の玉をぶちのめしてやろうかい、この宿なしのフィン公め！」ほとんどの者はすでに寝床にあがりこんでいたから、この水夫部屋は、いまやこの二人だけといっていいくらいだった。無一物だったドンキンの活躍ぶりが、がぜん一同の興味をひいた。彼はびっくりしているフィンランド人の前で、ぼろをまとったからだを躍りくねらせ、鈍重で無表情な顔をねらって遠くのほうからボクシングの構えをした。これを見た二、三の連中は、「そらゆけ、おんぼろ大将！」と大きな声でけしかけたが、自分たちは気持よさそうにベッドに寝そべって高見の見物をきめこんでいた。「しずかにしろ！……そんな奴はお陀仏になっちまえってんだ！……」とどなる者もあった。かくてふたたびさわぎがおこりかけたのであるが、まさにそのときである、突然頭上の甲板を木槌ではげしく連打する音が、まるで小型の大砲をぶっぱなしたかのように、水夫部屋じゅうにとどろいた。そ

れから水夫長がゆっくりといかめしげな声でどなるのがきこえた。「おーい、下にいる連中！　わかったか？　総員点呼！　艫へ行け、艫へ！」

一瞬ぎくりと静まりかえった。そのあとたちまち、寝床から男たちがぴょいぴょいととび出してきて、ごったがえす彼らのはだしの足が部屋の床をうめつくした。くしゃくしゃの毛布をひっくりかえして帽子を探す者もあれば、あくびをしながら腰のバンドをとめる者もある。吸いかけのパイプをいそいでそのへんの木にこつこつぶつけてから枕の下につっこむ者もいれば、「なにごとだい？……おれたちにゃ休息なんてねえってのか……」とぶつくさいう声もあった。

ドンキンはきゃんきゃん声をあげて言った。「この船じゃこんなふうにやるってんなら、ぜひ改革の必要あり、ってわけだ……みんな、おれのことはほっといて行ってくれ……おれ、そのうちきっと……」誰も彼のことなど相手にしなかった。みんなは戸口から二人三人とかたまってよろよろしながら出てきた。この歩き方が普通の陸上の男とちがうところで、彼らは一人ずつさっさと出てくるようなことはしないのである。改革を唱えた例の男もけっきょくあとからついてきた。ジャケツに腕をとおそうとやっさもっさしながら、シングルトンが一番あとから出てきた。年とった運動家を思わせる胴の上に、久しく風雪にさらされた賢者めいた顔を昂然とつけた彼は、背高々としていかにもおやじ然とした雰囲気をただよわせていた。白く光った人気のうせた部屋にはチャーリイだけがひとり残って、せせこましい船首の闇にむかってのびた二列の錨鎖の間にすわっていた。彼はラニヤード結びをさっさときりあげようとして、撚り綱をぐいと引っぱった。とつぜん彼はたち上がると、手にしたロープを黒猫めがけて投げつけ、あとを追いかけたが、猫は錨鎖止めの上にちょんとのって、しっぽを小さな旗竿のようにぴんと立てた。

むしむししした水夫部屋のそとでは、すみきった夜が、なまぬるい息吹きで船の人々をやさしく包み、マストのはるか上には、無数の星が、きらきら光る塵屑でできた薄雲のように見えた。町の側はと見れば、陸地から幾本かの細い光の条があたかも根を岸辺に発し、そのあとこちらへ泳いできたかのようにつーっと伸びてきて、黒々とした海の面にあかるい縞をこしらえ、さざ波にゆらゆらとゆれていた。そのほかにもまっすぐな光の筋が幾つとなく、そそり立つ建物の間にさながら行列のごとくならんでさし出ていた。しかし町の方向の反対側には、黒ずんだ山々がその背で弓形の弧を描き、そのあちこちには、星が、あたかも空から火花がふってくるかのようにまたたいていた。ビクラの方角はるか遠くには、ドックの入口の高いやぐらの先端にともされた白色の電燈が、虜囚の目に遭っているあやしい亡霊のように、つめたくこうこうと輝いていた。碇泊所の黒光りした水面には、いくつもの船がしんとしずまりかえって浮かんでいた。うす暗い碇泊燈の光のもとに、ぼうっと大きく浮かび出たそれらの姿は、もはやおとずれる人も絶えて永遠の憩いについた、なにかふしぎな記念建造物を思わせた。

船室の戸口の前では、ベイカー一等航海士が水夫たちの人員点呼をするところだった。水夫たちがのろくさと主檣の横を通りぬけてやってくると、手にした白い紙を見つめているベイカー氏のまるい大きな顔が船尾のほうに見えた。彼のすぐ脇では少年給仕が明るいランプを片手でかざすようにして立っていたが、この男のまぶたのたれた眠そうな顔はベイカー氏の肩のあたりに並んでいた。甲板の上をはだしでひきずるようにして歩く彼等の足音がしずまらないうちに、一等航海士ははやくも点呼をとりはじめた。彼はいかめしい調子で名前をはっきりと呼び上げた。その声の調子は真剣そのもので、この航海の前途によこたわる不安なる孤独や、人知れぬ闘いや、あるいはまたかずかずの困苦窮乏とつらい義務の忍従などというものに、いかにもふさわしい感じを与えるのだった。名前が呼び上げられるたびに「はい！」とか「います！」という返事があり、右舷の黒々とした舷墻から上に頭だけつき出て見える人の群のなかから一人ずつ出てきた。彼等はランプによってできたあかるい光の輪の中にはだしで進み出ては、ふたたび音もさせずに二歩あるいたかと思うと、左舷後甲板の暗がりのなかに消えてゆくのだった。返事の仕方はさまざまだった。口重そうにぶつぶつと答える者もあれば、りんとした声ではきはき答える者もあった。なかには、

点呼そのものが癪にさわると言わんばかりに、とげとげしい語気で返事する者もあった。とかく商船の場合、厳格な規律といったものは守られにくいからである。こういう船では、人々の間に上下関係の意識が乏しく、広大無辺の冷淡なる海ときびしい作業の要請を前にしては、すべての人間に差別はないと感じられるからである。

ヘイカー氏は次々と船員名簿を読み上げていった。「ハンセン――キャンベル――スミスーワミボウ。おい、どうした、ワミボウ。なぜ返事しないんだ。おまえはいつも二度呼ばなきゃだめなのか」フィンランド人はやっとぶつくさいうような声を出して進み出ると、ひょろっとして薄気味わるいような、それでいて妙に気取った態度で、まるで夢のなかを歩いている男のような顔つきのままあかるい光の輪のなかに姿をあらわし、またそこからぬけ出ていった。一等航海士の点呼はだんだん早くなった。クレイク――シングルトン――ドンキン……うむっ！」彼は思わずさけんだ。目を疑いたくなるほどみすぼらしい男の姿が光のなかに現われたからである。その男はつと立ちどまると、青白い歯ぐきと長い上歯をむき出しにして、意地のわるいうす笑いをうかべた。「だんな、あっしがどうかしたってんですかい？」と、男は表面はわざとしらっぱくれてみせながら、そのくせふてぶてしい調子で言った。右舷からも左舷からもしのび笑いがおこった。「いや、よかろう、あっちへゆけ」とベイカー氏は、青い眼をこの新入りの男にじっとそそぎながら、うなるように言った。ドンキンはあかるい場所からさっと身をひくと、暗がりにかたまった人々の間に姿を消したが、はたして、仲間たちは彼の背中をたたいてひそひそお世辞を言うのだった。彼の周囲では口々につぶやく声がおこった――「あいつ、ちっともこわがっていやしねえ、面白がらせようってんだ……まったく滑稽な人形芝居ってところさ……見たろう、彼氏びくりととびあがったぜ……そうさ、ほんとだぜ……」

最後の男の点呼も終わって、しばらくのあいだ沈黙がつづいた。ベイカー氏は人名リストをのぞき込んで「十六人、十七人」と小声でかぞえていたが、急に大きな声で「水夫長、一人たりないぞ」と言った。彼のすぐ脇に立っていた、スペインの巨人のごとく鬚をはやして浅黒いからだをした、イギリスの西部に生まれたこの大男は、ごろごろひびく低音で答えた――「部屋にはもう一人も残っていませんぜ、わしはちゃんと見まわってきたんですから。まだ乗船してねえんでしょうが、あした日の出前には来るかもしれませんぜ」――「そうだな。来るかもしれんし、来ないかも知れんな」一等航海士は言った。「この最後に書いてある名前はよくわからん。ごちゃごちゃした字だ。……おい、みんな、これですんだ。下へ行ってよろしい」

輪郭もおぼろげな、しずまりかえった人々のむれは、これをきいてにわかにざわつきはじめ、群をこわしててんでに前部甲板のほうへうごき出した。

「待った！」大きな声がひびきわたった。

全員ははっとなって立ちどまった。あくびをしながら船室のほうへもどりかけていたベイカー氏は、あけた口をとじるまもなく、さっとふりむいた。思わず彼はかっとなってどなった。「なんだと？　だれだ、待てと言ったのは、え？」

見れば、背の高い人影が手すりの上に立っていた。その人影は下へおりるとむらがる一同をかきのけ、後甲板のあかりへと向かって、のっしのっしと重い足どりで進んできた。またしてもよくひびく大きな声が発せられた。「待った！」ランプの光はその男のからだを照らし出した。背が高い男だった。頭はずっと上のほうにあって、甲板の上の端艇梁にのせてあった救命艇のあたりにかくれ、そしてその暗がりのなかで、眼の玉と歯の白いのが、くっきり光っていた。顔は全然わからない。手は大きく、手袋をはめているかのようだった。

ベイカー氏は怖れずつかつかと前へ出て行った。「だれだ、おまえは？　なんだってそんなこと言うんだ？」

給仕は、みなと同じようにびっくりしていたのだが、この男の顔へ高々とランプをつきつけた。その顔は真黒だった。驚きのざわめきが、「黒ん坊だ」と息をひそめてささやきかわすらしいざわめきが、甲板を伝わり、夜の闇に消えていった。黒人はこれを聞いてもいないようすだった。拍子でもとるかのように気取ったかっこうでからだをゆすっていたが、やがてもの静

かに口を切った。「あたしの名前はウェイト、ジェイムズ・ウェイトでさあ」

「ううっ！」と思わずベイカー氏。そのあと数秒間彼はぐっとおしだまってしまったが、ついに怒りが火を吹いた。「ようし、きさま名前がウェイトだっていうんだな。それがどうした？なんの用だ？　ここへ来て大きな声なぞ出しやがって、なんだっていうんだ？」

黒人は冷然と落着きはらい、巍然としてそびえていた。人々は近寄り、彼のうしろにひとかたまりになって立っていた。彼等のうちで一番背の高い者よりも、黒人はさらに頭半分ほど高かった。「あたしはこの船の乗組員でさあ――」彼はしずかに、はっきりした調子でしゃべった。じーんと深くしみとおるその声は、わけなく甲板全体にひびきわたった。彼は、あたかもあたり一面にひろがる人間世界の愚かしさというものを、まるで六フィート三インチの高みから見おろすかのように、はじめから人をばかにしたようなところがあった。しかしそれでいて彼は、人間どもの愚かさにあまりきびしくのぞむのはやめておこうと心に決めたかどうかしらないが、いわゆるぶったところがなく、へりくだった態度も見せるのだった。彼はことばをつづけた。「船長さんが今朝あたしのことを雇ってくれたんです。だけどもっと早くから来ることはできなくってね。はしごをあがってきたら、あんたがみんなの名前を呼んでるのがすぐと見えたもんで。だからウェイトってのは、あたしの名前を言ったまでですさあ。その紙に書いてあるはずですがね。わかりませんか？　勘違いでもしてるんじゃないですか？」彼はつと話すのをやめた。彼の周囲にむらがる愚かな連中はあっけにとられていた。やはり彼は正しかったのだ、そしてまた、べつに腹を立てた様子もなく、人間の愚かさを彼はゆるす気でいるのだった。人を馬鹿にしたような調子はすでになく、彼はただ重々しく息をつきながら、大勢の白人たちに取り囲まれてじっと立っていた。彼はぎらぎらと燃えるランプの光のなかに、頭を昂然ともたげていた。黒々した闇とランプのあかるい光にくっきりと浮かびあがった頭。だが顔はといえば、そのたくましい頭とはうって変わり、苦悩にあふれ、うちひしがれ、痛ましげな、畜生のごとき顔だった。黒人の胸の奥を表わしているというべきであろうか、悲劇的で、神秘的で、近寄りがたい顔。

ベイカー氏は落着きを取りもどすと、名簿をとくと見て言った。「そうかそうか。よしわかった、ウェイト。おまえの荷物を持って前へゆきたまえ」

とつぜん、黒人の眼はぎょろりと白眼に変わった。彼は脇腹に手をやって、二度咳をした。その咳たるや、金属的な、うつろな、おそろしく大きな音で、さながら空洞の中で二回爆発がおこったかのごとくだった。それは大空なる円天井のもとでこだまし、鉄の舷墻もいっせいに振動するかに思われた。やがて彼はほかの連中といっしょに船首のほうへむかって歩いて行った。船室の戸口にまだたたずんでいた一等航海士たちの耳には、彼がしゃべるのがきこえた。「だれか、おれの荷物をはこぶのに手をかしてくれないか。衣装箱と袋が一つだ」この言葉、なんの抑揚もない平坦な調子で言われたにもかかわらず、いやによくひびいて船内くまなく聞こえ、厳として拒絶を許さない感じを与えた。船首の水夫部屋へむかって、重い物をはこんでゆく人々のちょこちょこした足どりがきこえてきた。だが黒人のひょろながいからだは、彼より小さい人間のむれにまじって、主舷口のあたりをまだうろついていた。ふたたび誰かにきいている声――「この船の料理人は色の黒いお人かい？」だが白人だと知らされると、彼は失望したように、不平そうな声で、「へえ、そうかい」とつぶやいた。しかしぞろぞろみんなと船首の水夫部屋へ行く途中、黒人はわざわざ炊事室の戸口から頭をひょいとつっこむと、大きな声で「やあ今晩は、先生！」と呼ばわった。その声のすさまじさに、鍋という鍋はいっせいにおどりあがって鳴りひびいた。うす暗いあかりのなかで、料理人は船長の夕食を前において石炭箱の上で居眠りをしていたが、とつぜん鞭でうたれたかのように跳びあがった。彼はあらあらしく甲板にとび出して行ってみたが、はや一同は背中をこちらに見せたまま笑いながらむこうのほうへ歩いてゆくところだった。後日彼がこの時の航海の話をするときには、きまってこう言ったものである――「あの野郎、ひどくびっくりさせやがってなあ。おれはあのとき、それっ悪魔だ、って思ったくらいさ」この

料理人は同じ船長と七年間いっしょに暮らしてきたのだった。いたってまじめな性分の男で、十一ヵ月間働いてはあとの一月を妻と三人の子供といっしょにくらすのをたのしみにしていた。陸上にいるときには、毎日曜二度ずつ教会に行き、海では毎晩きまってランプの芯をいっぱいに出して、パイプを口にくわえ、聖書を開いて手に持ったまま眠ってしまうのだった。かならず誰かが夜の間に彼のところに行ってランプを消し、聖書をたたみ、パイプを歯の間から抜きとってやらなければならなかった。「だっておまえ」とベルファストはさも癪にさわったように不平顔で言うのだった。「このばかコックめ、きっとそのうちおまえはパイプをのみこんじまうぞ。そしたらおれたちの船はコックなしってことになっちまうじゃねえか」――「ああ、坊や、おれはいつ神様のお召しがあったって平気さ……おまえたちだってみんなそういうふうでなくちゃな」と相手は答えてさらりとしたもの、それが馬鹿みたいな言い方にも聞こえるが、そのくせほろりとさせるところがあるのだった。ベルファストは炊事室の戸の外で地団太をふんでくやしがった。「信心ぶった阿呆め！　おまえさんに死んでほしくはねえよったら！」彼は顔をわなわなと震わせながら猛然といきり立ったが、眼は案外とやさしい。「いそぐことないじゃねえか。こののろまの、おいぼれの、罰あたりめ！　あわてなくったって、そのうち悪魔のほうからとっついてくれるにきまってらあ。それよか、おれたちのことを考えてくれなきゃ困るじゃねえか、おれたちのことをさ。だいじなんだぜ、おれたちは」こうしてベルファストは、気を腐らせ、いらいらした様子で足をどかどか踏みならし、唾をペッペと吐いて出てゆくのだった。料理人のほうはしごく落着きはらい、垢じみた恰好のまま浅鍋片手に部屋の外へ出てきて、優越的な微笑を浮かべつつ、彼のいわゆる「へんてこな小男」が怒りにからだを震わせながら遠ざかってゆく後姿をじっと見守るのだった。けっきょく二人は大の仲好しなのである。

ベイカー氏は二等航海士と連れ立って、後部艙口のあたりをぶらつきながら、しめった夜の空気を鼻から吸っていた。「西インドの黒ん坊ってのは大きくなるもんだな、まったく、あいつときたら……うーむ！　そう思わんかね。さっきの奴も大きないいからだをしてる、なあクライトン君。なにが得意かひとつやらせてみようじゃないか、ええ？　うーむ！　あいつをぼくの当直員の中にいれようかと思うんだがね」二等航海士は、きっとした顔つきと立派な体格をもった、色白の紳士タイプの青年だったが、どうせそうだろうと思っていたとしずかに答えた。彼の返事のなかにはいくらか恨みがましい調子がふくまれているように感じられたので、ベイカー氏はきわめて婉曲に弁解をはじめた。「まあ、まあ、きみ……」そう言って彼は言葉の合間合間に、うーむと咽喉を鳴らすのだった。「まあ、きみ、そんなに欲ばらなくてもよかろうじゃないか。あの大男のフィンランド人はきみの班の当直でずっと使っていたじゃないか。きみにたいして不公平なことはないようにするよ。きみはあの若い二人のスカンジナビア人をとってもいいんだぜ。そこでぼくは、と……うーむ……ぼくはあの黒ん坊をもらうことにして、あとにもう一人は、と……うーむ……あの黒い服を着たずうずうしい叩き売り野郎でもとることにしよう。あいつには、ひとつ……うーむ……なにがなんでも言うときかしてやらなくちゃ……うーむ……ベイカーのこけんにかかわるというもんだからね。うーむ、うーむ、うーむ」

彼は三度おそろしげに咽喉を鳴らした。話の合間や言い終わったあとにうーむというのが、彼の癖だった。このうなり声は、相手への威嚇になかなか効果をあげるものだった。しかも彼は猪首でずっしりしたからだつきときている。癇性らしく、どしんどしんとした歩きぶりだ。傷痕のある大きな顔、相手をじいっと見すえるような眼つき、せせら笑うような口もと――こういったものと相まって、彼のうなり声はたいした効力を発揮するのである。しかしその利き目も、船の連中にはだいぶ前から薄くなっていた。彼等はベイカー氏のことを好いているのだ。ベルファストは（この男は彼のお気に入りで、自分でもそれを心得ていた）まさかベイカー氏のすぐうしろでやるわけではないが、彼の真似をする。チャーリイは、用心深くこっそりかくれて彼の歩きっぷりの真似をする。彼がしゃべることばのいくつかは、いわゆる慣用句になって、水夫部屋では毎日のように用いられるあり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com